

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本語とインドネシア語の助詞
Author(s)	モハマド イリヤス,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 1997 : 15 - 21
Issue Date	1998-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039379
Right	
Relation	



日本語とインドネシア語の助詞

モハマド・イリヤス

0. はじめに

母国語といろいろな面で異なる外国語を勉強するとき、最初のうちいろいろわからないことがある。私は母国語であるインドネシア語とかなり言語構造が違う日本語を勉強している。日本語を勉強し始めたとき、一番難しかったのは助詞の使い方である。インドネシアの私の大学では日本語の文章に助詞を入れる練習をよくした。それはつぎのような問題だ。

-- 私は田中さん _____ 会った。

私はよく分からなくて、「と」を入れたが、この文は「に」を入れても正しい。

a. 私は田中さんと会った。

b. 私は田中さんに会った。

この文で助詞は、「に」も「と」も使われる。しかし、これらの助詞がどうしてどちらも正しいのか、その説明は全然されなかった。それで、「先生、どうして二つ助詞を使うんですか」と聞いた。すると先生は「そうだからそうなんです。答はそのまま覚えなさい。すまないけど、あとで調べておきますから」と言った。それは大学二年生の時だったが、その先生は未だに説明してくれていない。そんなことがよくあったので、私は助詞を研究し、助詞が文の中でどういう働きをするのか考えたいと思ってきた。このレポートでは日本語の助詞とインドネシア語の助詞を比べてみようと思う。

1. 言葉の接続

人間は言葉を使い、思想や感情を表現し、理解している。これが言語活動だ。この言語活動を成り立たせ、そのよりどころになるものはさまざまな社会習慣、体系であるが、この言語自体極めて複合的なものである。言語はさまざまなものからできた体系である。つまり、その構成には規則性がある。体系として、他の言語と同じく、日本語は音韻、文法、語彙などからなっている。しかし、どの言語も他の言語にない要素を持ち、ユニークである。言語体系の構成要素には普遍的なものもあれば、特殊に近いものもある。後者の例の一つに、インドネシア語の特徴である *preposition*、すなわち、従属する名詞の前に付けられる助詞、つまり前置詞がある。

一方、日本語では、助詞が名詞の後ろに付くので、*posposision*、つまり、後置詞で

(2)

ある。しかし、インドネシア語の形容詞は名詞を後ろから修飾するが日本語の形容詞は修飾される名詞の前に付く。

インドネシア語でも、助詞は文の構成要素を継ぎ、文法的な意味を表わす統合要素としての役割を果たす。

2. 助詞の意味

助詞は文法的な意味を表わしたり、従属する語に一定の意味を添えたりする統合的な要素だ。相手が理解できるように話すためには、単語とその意味を考えるだけではなく、その発話を構成するこの統合要素の文法的な意味を考えなければならない。次のインドネシア語で、発話に含まれる文法的な意味を考えてみよう。

Anak (子供) / Minum (飲む) / Air (水) / Rumah (家)

これらの言葉には語彙的な意味しかない。

Anak : 年の若い人、少年、少女の総称。

Minum : 口にいれ、かまずにのどを通す。

Air : 川、池、海、雨などの形で、自然に普通に存在する冷たい透明な液体。

Rumah : 人が住むための建物、すまい。

そして、これらの言葉で発話を構成すると、次のようになる。

Anak minum air di rumah

(子供は家で水を飲む)

このようにpartikelの「di」を付けると、ここには新しい意味がつけ加えられる。この新しい意味とは動作をするものが何であり、動作を受けるものが何であるか、またそれがどこで行われるかを示すものであり、これが文法的な意味である。インドネシア語ではpartikel、助詞が必ず従属する名詞の前か動詞の後に付き、日本語では従属する名詞の後か動詞の前に付く。

表わそうとする内容が単純なものであればともかく、何百語何千語を用いて表わなければならない場合には、それを切れ目ない一続きのものとして表現することも、このような表現を理解したりすることも人間にはできない。それで、その内容を細かく区切って表わすほかない。その一つ一つのまとまりが文である。文は内容においても形式においても、一つのまとまりとしての性質を持つ、文章、談話を構成する単位である。文章、談話は二つ以上の文からできていることが多いが、一つの文だけでできているものもある。

また、文は普通いくつかの単語が連なってできているものだが、単語が直接文を構成するというよりは、単語がいくつか集まって一まとまりとなり、それが文を構成すると見るほうが考えやすい。このような、文を構成する上での機能的統一体は文の成分と呼ばれる。文の成分である文節はいくつかの語でできているものもあれば、一語のもの

もある。文節という言語単位をさらに分解すると、語（単語）が得られる。

インドネシア語では、助詞はpartikel(英語のparticle)とも呼ぶ。partikelは語彙としての意味（接頭辞、接尾辞、前置詞、接続詞、指示詞などのような）を持ってない文法構成素であり、付属語には付かず、自立語、つまり語彙としての意味を持っている語（名詞、動詞など）に付くものだ。たとえば、*ayam* (鶏)、*rumah* (家)などは語彙としての意味を持つてるものであり、*Di* (に、で)、*Pun* (も) *Ke* (へ)、*Pada* (に) *Dari* (から)、*Daripada* (より)、*Untuk* (ために、に)、*Supaya* (の、ように)、*Agar* (ように)、*Pula* (も、にも)などは語彙としての意味を持っていない。あくまで助詞は文の構成素を繋ぐだけの統合的要素であり、このような文法的機能こそが意味である。

例文：

a. インドネシア語；

- *Saya belajar bahasa Jepang di universitas Hiroshima.*
(私) (勉強する) (言語) (日本) (で) (大学) (広島)
私は広島大学で日本語を勉強する。
- *Dodo pergi ke pasar untuk membeli sayuran*
(ドド) (行く) (へ) (市場) (に) (買う) (野菜)
ドドさんは市場へ野菜を買いに行く。
- *Ange adalah mahasiswa yang datang dari Sikka.*
(アングさん) (です) (大学生) (という) (から) (シッカ)
(アングさんはシッカから来た大学生です)

b. 日本語；

- ゆみさんは次郎君と話した。
(Yumi) (*) (Jiro) (dengan) (berbicara)
Yumi berbicara dengan Jiro.
- 増谷さんはプダックの会社に勤めている。
(Masutani) (*) (Pudak) (perusahaan) (di) (bekerja)
Masutani bekerja di perusahaan Pudak.
- 太郎君はバスの中ですりに財布を盗まれた。
(Taro) (*) (bis) (*) (dalam) (di) (pencopet) (oleh) (dompet) (*)
(dicuri)
Dompet Taro dicuri oleh pencopet di dalam bis.

上の例に見るように、インドネシア語では助詞(*di, ke, untuk, dari*)が名詞の前に置かれて

(4)

いるが、日本語では助詞（は、と、に、で、を）が名詞の後に置かれている。
二つの言語の助詞には次のような共通の特徴がある。

1. 数が限られている

即ち、文化、言語が発展しても、他の品詞と違って、その数は増えない。

2. 閉鎖的である

つまり、その数が増えたり減ったりすることはない。

3. 形態的な変化がない

つまり、活用する動詞、形容詞と違い、助詞は活用しない。

4. 語彙としての意味を持っていない

つまり、動詞や名詞のような語彙的な意味を持たない。

5. 文法的な意味しか持たない

つまり、文の中で使われて、その意味を発揮する。

6. どんな文にも付く

7. 数が限られているので、用法が習得しやすい。

インドネシア語では名詞の前に置かれるので、preposisiとも呼ばれる。

3. 助詞と分類

日本語では、機能によって分類されている。橋本文法による助詞の分類を見てみよう。

(1) 格助詞

体言について、用言、述語の意味内容を詳しくして事柄を描くための成分＝補充分や状況成分を作り、その語と用言、述語との論理的関係を示す。格助詞に属する後は、が、を、に(pada)、へ(ke)、と(dan)、より(daripada)、で(di)などである。

(2) 副助詞

体言や、体言に格助詞のついた成分、状態副詞、程度副詞、用言の連用形、テ形などに付き、シンタグマチックな関係の中で、その統括するものとパラダイグマチックな関係に立ち得るほかのものとの関係に言及する語である。副助詞には ばかり(saja)、まで(sampai)、など(dan lain-lain)、だけ(hanya)、くらい(kira-kira)、やら(dan)、か(apakah)、などがある。

(3) 係助詞

文末の述語に関係のある語や成分に付いて、述語の述べ方に影響を及ぼすもの。は(adalah)、さえ、こそ(memang)、でも(walaupun)、ほか(lain)、しか(hanya)、などがある。

(4) 接続助詞

用言、述語について、その統括するものを節や句として求め、それをその他の節や句に続けていく助詞。ば(bila)、て(karena)、ても(meskipun)、ところが(akantetapi)のに(untuk)、し(dan)、と(dengan)、ので(karena)、から(karena)などがある。

(5) 準体助詞

ほかの語について、ある意味を加えて、全体として体言と同じ機能を持ったものを作るもの。の「私のは」、ぞ「誰ぞ」、ほど「三つほど」などがある。

(6) 並立助詞

対等の関係で前の語に連続することを示す。と(dan)、や(dan)、やら(dan)、に(dan)、か(atau)、なり(dan) などである。

(7) 終助詞

終助詞と間投助詞（間投性終助詞）については後で触れる。なお、これらの助詞を語として認めない説もある。ね(kan)、よ(lho)、ぞ(yo) などだ。

文を構成している形態素の配列の規則を研究する分野は形態論あるいは構文論であるが、日本語においても文法にかなった文は、形態素が何らかの規則に従って、配列されていると考えられる。

4. 助詞の同義性

日本語の助詞もインドネシア語の助詞も同じ意味で使われるものがいくつかある。一つの意味がただ一つの助詞によって表されるだけでなく、同じ意味を持った助詞が複数あり、ほかの助詞に換えても同じような意味になることがある。以下のものがその例である。

インドネシア語 :

1.a. Saya memberi pinjam pensil pada dia.

(私) (あげる) (貸す) (鉛筆) (に) (彼/彼女)

私は彼に鉛筆を貸してあげる。

b. Saya memberi pinjam pensil untuk dia.

(私は) (あげる) (貸す) (鉛筆) (に) (彼)

私は彼に鉛筆を貸してあげる。

2.a. kami pergi ke pantai tetapi Dodo tidak pergi

(私達) (行く) (へ) (海岸) (が) (ドドさん) (否定詞) (行く)

私達は海岸へ行くがドドさんは行かない。

b. Kami pergi ke pantai sedangkan Dodo tidak pergi

(私達) (行く) (へ) (海岸) (が) (ドドさん) (否定詞) (行く)

(6)

私達は海岸へ行くがドドさんは行かない。

上の例では、1.a.におけるインドネシア語の助詞のpadaは1.b.のようにuntukに換えることができる。上記の文におけるpadaとuntukはほぼ同じ意味を持っている。インドネシア語では同じような意味を持つpartikelがいくつかあり、ほかのpartikelと文章の意味を変えないで、置き換えができる。2.a.における助詞のtetapiもsedangkanもほぼ同じ意味を持っており、書き換えてもほとんど意味は変わらない。

日本語においても同じような意味を持つ助詞はいくつかあり、同じ文章でどちらを使ってもほとんど意味は変わらない。

例えば；

- 私はかほりに手紙を書く。

(saya) (*) (Kahori) (pada) (surat) (*) (menulis)

Saya menulis surat pada Kahori.

- 私はかほりへ手紙を書く。

(saya) (*) (kahori) (ke) (surat) (*) (menulis)

Saya menulis surat ke Kahori

これらの文で助詞の「に」と「へ」は入れ換えができる。つまり、ここで「に」と「へ」は同じ意味を持っていることになる。

5.おわりに

助詞はインドネシア語にも日本語にもあり、具体的な意味を持っているというより、他の語に付けられて、その語と他の語との関係を表わしたり、その語に一定の意味を添えたりする機能を持っているものだ。言い換えれば、文の構成素を他の構成素と継ぎ、文法的な意味を付け加えるものである。日本語でもインドネシア語でも同じ意味を持つ助詞がいくつかあり、助詞を入れ換えることができる。つまり、助詞はヴァリエントがあるということだ。日本語の助詞（あるいは後置詞）もインドネシア語の助詞（あるいは前置詞）も言語表現の根本を考えれば、機能としてはそれほど異なるものではない。日本語では助詞の分類が細かくされるが、インドネシア語ではそういう分類はない。インドネシア語では助詞も感動詞も接続詞も同じ範疇に入れられてしまっており、このような問題はもっと調べなければならない。日本語とインドネシア語の文法の違いは、このような点からも研究されなければならない。

参考文献

- | | | | |
|---------------|-----------------------|---------------|------|
| 1. 金田一春彦 | 日本語の特質 | 新NHK市民大学叢書 | 1981 |
| 2. 助詞の歴史的研究 | 石垣 謙二 | 岩波書店 | 1955 |
| 3. 現代の日本語 | 西田 直敏、西田 良子 | 桜楓書店 | 1993 |
| 4. 言語と構造 | R.ラネカー | 大修館書店 | 1970 |
| 5. 構造的な意味論 | 国広 哲弥 | 三省堂 | 1968 |
| 6. J.S Badudu | Tata Bahasa Indonesia | Sinar Harapan | 1991 |